



宮城女学校第7回生の夫たち —顔写真特定と目歯比率—

佐藤 亜紀

はじめに

2022年10月26日に宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所主催の公開研究会「悲しみを語り伝えるために—旧約聖書にみる語り部の格闘—」が開催された。講師は青山学院大学教授左近豊（とむ）先生でオンラインで参加した。数日後、資料室に佐々木学院長より電話があった。「左近豊先生の曾祖父左近義弼（よしすけ）氏の妻は宮城女学校を卒業した津田まつだが、本当かどうか調べてほしい」との問い合わせだった。早速調べたところ、1899（明治32）年宮城女学校第7回卒業生の写真と卒業生の名前の一覧があった。そこに併記されている配偶者の名前から津田まつ当人であると確認された¹。NHK朝の連続テレビ小説「はね駒（こんま）」のモデルとなった小泉ハルの名前もあった。小泉ハルについては他にも写真があり容易に特定できた。しかし、他の4名については資料がなく名前と顔の特定に至らなかった。左近豊先生に卒業写真を送り判定を依頼したところ、晩年の左近夫妻の写真と共に後列右が津田まつと判断される旨ご返事をいただいた²。

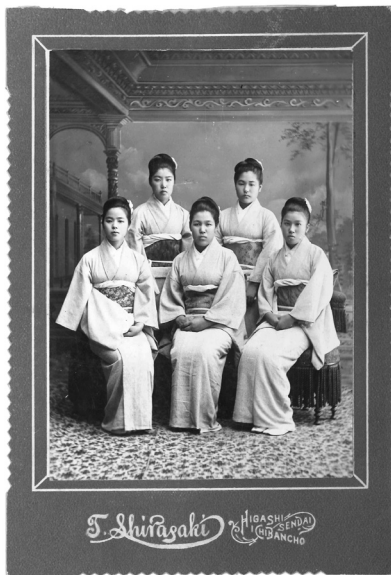


写真1. 第7回卒業生

小泉ハル（磯村源透氏夫人）
菊地トラ（加藤與五郎氏夫人）
安部ヤス（笹尾糸太郎氏夫人）
津田まつ（左近義弼氏夫人）
森 かの（酒井勝軍氏夫人）

¹ 『校報—私立宮城女学校—』第二号1918（大正7）年、34-35頁。

² 佐々木哲夫「巻頭言：資料室の使命」『資料室年報』第28号（2023年）、3-6頁。

左近先生のご協力により津田まつが特定された。残る3名についても特定のための手掛かりを探し始めた。その作業の過程において彼女たちの夫が実業家・化学者・哲学者など様々な分野で活躍した人物であることがわかった。また卒業生たちの晩年の写真も見つけることができた。

本稿は、第7回卒業生の夫たちの生涯を紹介するとともに、卒業写真の人物特定を試みるものである。

I. 第7回卒業生の夫たち

第7回生の夫たちは、実業家・化学者・哲学者など様々な分野で活躍した人物であった。各人の夫たちについて以下紹介する。

1. 磯村源透 (いそむらげんとう)

小泉ハルの夫である磯村源透についてのまとまった資料を管見につき見つけることができなかった。ハルについての資料は、ドラマ「はね駒」を機に出版された磯村英一『実録はね駒』やハルの信仰に焦点をあてた横山麗子『天まではねろ』がある。その中に源透についての言及がある³。ハルの長男磯村英一は著名な社会学者であり、自身の著書『私の昭和史』の中で父親について触れている⁴。これらを参考に磯村源透について紹介する。

生い立ち・結婚

磯村源透は、愛知県名古屋市の寺の息子として生まれ、1925(大正14)年に56歳で亡くなっている⁵。逆算すると、源透は1869(明治2)年の生まれになる。ハルは1877(明治10)年生まれであるから源透は8歳上になる。

ハルは、福島県相馬市出身で父伊助、母カツの長女として生まれた。家は、屋号を出羽屋と称する広幅生地を扱う生地屋を営んでいた。家のすぐ近くに教会がありハルは幼いころから教会(現日本基督教団中村教会)に通っていた。牧師の吉田亀太郎から宮城女学校を紹介され入学した。卒業後、母校の教師を2年半ほど務め、その後、上京し1903(明治36)年に源透と結婚する。ハル26歳の時だった。信仰も出身も違う二人がな



写真2. 磯村源透(右側)
『天まではねろ』67頁)

³ 磯村英一『実録はね駒』開隆堂、1986年、48-49頁。横山麗子『天まではねろ』いのちのことば社、1988年、64-68頁。

⁴ 『私の昭和史』中央法規出版、昭和60年、37-38頁、245頁。磯村英一は、社会学者で都立大学教授、東洋大学学長を務めた。

⁵ 『私の昭和史』245頁。

ぜ結婚に至ったかは、その子供たちにも不明である⁶。当時の源透は、泥炭の販売や乾電池製造の事業に携わっていた。ハルは英語の専門書の翻訳を手伝う中で、さらに語学にみがきをかけようと創立されたばかりの日本女子大学校に入学する。在学中に身籠るがそのまま通学し、津田塾大学の前身の女子英語塾にも籍を置く。ハルの旺盛な知識欲と行動力が目立つ。女が学問をすれば生意気になる、妻を働かせるのは甲斐性なしと言われた時代のことであり、忘れてはならないのは源透の理解と寛容さである⁷。

その後

源透の仕事（この頃は貿易業）も順調に伸び、磯村家は経済的にかなり恵まれたので東京品川の御殿山に居を移す。ハル自身にも大きな転機が訪れる。1905（明治38）年、報知新聞の婦人記者第1号として採用されたのだ。ハルの入社より8年前に羽仁もと子が報知新聞社に入社している⁸。羽仁は校正係として採用されており、婦人記者として採用されたのはハルが第1号である⁹。婦人記者としてのハルの活躍は、後の米国大統領となるタフトとの単独会見や女性日本初飛行船乗船などまさにドラマの如く「はね駒」であった。



写真3. 職場に子供を連れて働いていたので「ルビつき記者」と呼ばれた（『実録はね駒』178頁）



写真4. 後の米国大統領タフト氏と共に映るハル（左から2番目）（『天まではねろ』110頁）

⁶ 『天まではねろ』65頁。

⁷ 『実録はね駒』48-49頁。

⁸ 羽仁もと子（旧姓：松岡）1873（明治6）年青森県八戸に生まれる。明治女学校卒業後、1897（明治30）年報知新聞社に校正係として入社し、後に取材記者として活躍する。その後、同職場の記者羽仁吉一と結婚し、夫婦そろって退社し、女性雑誌「家庭之友」（「婦人之友」の前身）を創刊する。

⁹ 『天まではねろ』92頁。

やがてその暮らしにも影が差す。源透が借金の連帯保証人になったことから工場を手放し会社が倒産したのである。御殿山の大きな家から小さな借家に引っ越さねばならなくなった。ハルの働きが一家を支えることになる。ハルは、10年勤務した報知新聞社を退職しフリーランスとなり精力的に仕事をしたが、夫の会社の倒産や仕事の過労、十一年間に八回のお産などの無理がたたり1918（大正7）年、41歳の若さで亡くなる。死因は心臓病だった。

病気がちだった源透は、関東大震災で頭を打ち2年ほど患い、1925（大正14）年56歳で亡くなっている。短い生涯において天まではねるほどの活躍をしたハルだった。そこに、妻を支え続けた夫源透の存在があったことは言うまでもない。



写真5. ハル最後の写真
『実録はね駒』230頁

2. 加藤與五郎（かとうよごろう）

菊地トラの夫である加藤與五郎は化学者・工学者だった。その分野の功績から「フェライト（亜鉄酸塩）の父」「日本のエジソン」と呼ばれ世界の工業界に大きく貢献した¹⁰。東京工業大学名誉教授、文化功労者でもあり晩年には私財を投じて財団法人加藤科学振興会を開設し後進の指導に当たった。與五郎については『加藤与五郎 人とその生涯』を参考に¹¹。

生い立ち

與五郎は、1872（明治5）年、愛知県刈谷市に農家の長男として生まれた。8歳のとき、母を失い、幼い妹の面倒をみながら暇さえあれば勉強をする子供だった。成績優秀な與五郎は、叔父から尋常高等小学校卒業後に小学校の授業生心得（教師）の検定試験を受けることを勧められる。合格した與五郎は、働きながら独学で英語や数学を習得し、その後、同志社ハリス理化学学校（同志社大学工学部の前身）に入学し優秀な成績で卒業する。

結婚

24歳になった與五郎は、東北学院の教師となり数学・物理・科学を担当する（1896年-1899年）。與五郎にとって、仙台の静かな環境と東北地方の素朴な人情は親しみを与

¹⁰ 刈谷市ホームページ 歴史・文化サイト <https://www.city.kariya.lg.jp/kankobunka/rekishibunka/jinbutsu/1006401.html>

¹¹ 安達竜作『加藤与五郎 人とその生涯』財団法人加藤科学振興会、昭和49年。

えてくれた。その間、宮城女学校で週に1回科学の授業を受け持つ¹²。

本人がなかなかの秀才なのだからお嫁さんも頭の良い人が良いだろうと、東北学院の同僚が與五郎の「お嫁さん探し」の世話をしてくれた。同僚の教え子に宮城女学校生の菊地トラがいた。トラは、1878（明治11）年、福島県相馬市に生まれ、生家は相馬藩の御用商人で、苗字帯刀を許された豪家であった。トラは突然の結婚話に戸惑い、どんな些細なことでも話し合えた同期生で親友の安部ヤス（結婚後笹尾）に打ち明け相談している¹³。ヤスは、「菊地さん、あなたにわからないことをわたくしがどうして決められますか…」と、二人は床の中で寝もやらず額を寄せて考えたが、どうにも思案が湧かなかった。トラは、周りからの推薦もあり、卒業後母校で1年間教師として働いたのち、1900（明治33）年に與五郎と結婚する。22歳だった。

その後

與五郎は、渡米しマサチューセッツ工科大学で研究に励み、帰国後は東京高等工業学校・東京工業大学電気化学科教授として定年まで務めた。晩年に、財団法人加藤科学振興会を創設し、科学に関する学術研究の奨励と科学教育の振興を図った。與五郎は生涯で300余りの研究を成し遂げ、フェライト磁石（酸化金属磁石）、フェライト製コア（酸化金属磁心）、アルミナ（酸化アルミニウム）の世界的三大発明をなした。これらはテレビ・ラジオ・電話などの現代のエレクトロニクス製品に不可欠な材料となっている¹⁴。與五郎は、1967（昭和42）年95歳で亡くなり、トラは1978（昭和53）年100歳の天寿を全した。長きに渡り與五郎を支え続けたトラの人柄は穏やかで愛情深く、與五郎の多くの子弟から慈母のように慕われた¹⁵。



写真6. トラ夫人と加藤與五郎氏
（提供：公益財団法人加藤科学振興会）

¹² 『天にみ栄え 宮城学院の百年』学校法人宮城学院、1987年、824頁。宮城女学校在職年：與五郎1898年-1899年、トラ1899-1900年。

¹³ 『加藤与五郎 人とその生涯』44頁。

¹⁴ 刈谷市ホームページ 歴史・文化サイト <https://www.city.kariya.lg.jp/kankobunka/rekishibunka/jinbutsu/1006401.html>

¹⁵ 『加藤与五郎 人とその生涯』8頁。

3. 笹尾糸太郎 (ささおくめたろう)

安部ヤスの夫である笹尾糸太郎はカントの哲学者で、彼の博士論文『カントの神概念』(1900年)は、カント研究史に残る重要文献の一つとされている¹⁶。また、東北学院、明治学院、横浜共立学園に於いて教育の普及・学園の発展に尽力した。糸太郎とヤスついては、次男洋二郎の妻菊枝が纏めた『笹尾洋二郎追悼文集 おもいで』、また勤務校で刊行された年史や紀要等にその生涯が記されている¹⁷。

生い立ち

糸太郎は、1871(明治4)年、山口県下関市の大きな酢屋に生まれた。3歳のとき、母を失い、祖父母も相次いで死去したため番頭に育てられた。父親は事業の失敗により全財産を失い、失意の中キリスト教に会い福岡の柳川教会牧師となる。その父から、糸太郎は洗礼を受ける。高等学校入学後、経済的事情から授業料免除制度のある明治学院神学部へ転校し、働きながら勉学に励み、卒業時には学校より栄誉賞が授与されている。その奨学金で渡米し、オーボルン神学校で学ぶ。その後ドイツに渡り、ベルリン、ハレ、ボンの各大学でキリスト教とカント哲学を研究した。ドイツ留学中親交を深めたシュネーダーの招聘に応じて東北学院神学部教授となる¹⁸。1902(明治35)年、糸太郎29歳の時であった。

結婚

東北学院で働き始めた糸太郎は、その年安部ヤスと結婚した。ヤスは1878(明治11)年、父安部良三清柔(きよあき)、母きぬの長女として宮城県仙台市同心町に生まれた。祖父は漢学者と知られ、父は県内の小学校の校長を務め、同心町の家は300年ほどの歴史がある由緒ある家柄に育った。宮城女学校卒業後は、シュネーダー夫人のもとでHelperとして働いた¹⁹。ヤス本人の回想記録を以下に引用する。

定めの課程を終え、〔宮城女学校〕卒業。友達もそれぞれ仕事に携わる事になった。私は学院長シュネーダー夫人の許に働く事になり、夫人の仕事の手伝いをした。伝導(原文ママ)の目的にて婦人会の指導に当たり、又は婦人方に英会話を教えたり、店員たちに夜学英会話を教えるなど、その他諸所方々の訪問等にて、なかなか多忙に働

¹⁶ 石川文康「笹尾糸太郎のカント理解一書かれた『序論』と生きられた『本論』」、『東北学院百年史各論篇』学校法人東北学院、1991年、241-267頁。

¹⁷ 笹尾菊枝『笹尾洋二郎追悼文集 おもいで』祥文社、2002年。以下『おもいで』と略記。荒井多賀子「共立女学校第五代日本人初代校長 笹尾糸太郎一人・信仰・思想」横浜共立学園「紀要」第12号抜刷、2002年。

¹⁸ D. B. シュネーダー：1887年来日、1901年押川方義の後を継ぎ、第2代東北学院院長に就任し、1936年までの35年間院長を務め東北学院の発展に尽力する。『東北学院の歴史』学校法人東北学院、2017年、46頁。

¹⁹ 『おもいで』16頁。

いた。それで少しは社会の片端を覗き見る事が出来た。嫁入りの話などもぼつぼつ持ち上がってきた。その頃、東北学院教授として来仙された笹尾糸太郎氏との話が起こり、両家両親達の賛成、友人たちの勧めもあって婚約する事になった。シュネーダー院長宅に於いて、親しき人々の祝福を受け結婚式を挙げ、後米沢高湯温泉に旅行に出掛けた²⁰。

その後、糸太郎とヤスは四男二女の子供に恵まれ、柳川の父の死後は、義母とその異母兄弟8人を引き取り仙台で暮らした。加えて、ヤスの弟2人や苦学生も一緒に面倒をみたので笹尾家は常に16～17人の大家族だった。経済的にも困難を極めたが、夫婦共々よく協力し子供と弟妹を育て上げ、医師、大学教授、音楽家等としてそれぞれを独立させた²¹。



笹尾家の家族 1925年ころ

	洋二郎	兄 東太郎
妹 きよ子	母 やす	父 糸太郎
	弟 昇	弟 勇三郎
		姉 あや子

写真7. 笹尾糸太郎氏とヤス夫人(『おもいで』35頁)

その後

30年近くつとめた東北学院(1902年-1927年)を去り、母校明治学院(1927年-1936年)に迎えられる。その後、横浜共立女学校(1936年-1941年)の要請により日本人初代校長に就任した。糸太郎65歳の時であった。1941(昭和16)年、糸太郎は70歳の生涯を終えた。ヤスは、そこから20年後の1961(昭和36)年、「私は幸福だった」との言葉を最後に83歳で旅立った。

4. 左近義弼(さこんよしすけ)

津田まつ夫である左近義弼は、聖書を原典から翻訳し出版した最初の日本人であり、また青山学院大学の教授として聖書語学や旧約聖書学を講じた研究者である²²。息子の義慈(よししげ)と孫の淑(きよし)は共に東京神学大学の教授である。2022年10月に開催された宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所主催の公開研究会で講演された青山学院大学教授の左近豊(とむ)先生は、淑氏のご令息である。左近家は日本における旧約

²⁰ 『おもいで』16-17頁。

²¹ 『おもいで』18頁。笹尾とヤスの子供達のうち、長女あや子の夫である高橋正雄は東北学院大学名誉教授、長男東太郎は医師、次男洋二郎は明治学院大学名誉教授であった。また、ヤスの弟である安部正義は、東北学院卒業後、ボストン音楽院に留学。後に東北学院、明治学院に勤め教会音楽の向上、讃美歌121番「まぶねの中に」を作曲する。

²² 左近義慈「左近義弼とその時代」『神学』27号、東京神学大学神学会、1965年、84頁。

学研究の一系譜である²³。義弼については、義慈の論文「左近義弼とその時代—日本の旧約学の歴史の一断面—」を参考に紹介する²⁴。

生い立ち・結婚

義弼は、1865（慶応元）年、福井県杉津の農家の三男として生まれた。1882（明治15）年、福沢諭吉の門下として慶應義塾で学び、その後、時事新報で働く。1887（明治20）年に渡米、90年にニューヨークで英訳聖書を初めて読み、キリスト教に入信する。原語から聖書を和訳することを志し、ギリシャ語やヘブル語などの聖書語学をドルー神学校とユニオン神学校で学んだ。1896（明治29）年、渡米した本多庸一から日本のキリスト教会の教勢を聞き、和訳聖書を手渡されその改訳の必要性を痛感する²⁵。

まつは、1878（明治11）年、山形県山形市に生まれ、1899（明治32）年に宮城女学校を卒業する。卒業後は、Helperとして婦人宣教師の下で働きながら、翌1900年に設置された宮城女学校一年制聖書専攻科（特別聖書科）で学ぶ²⁶。1901（明治34）年2月2日、福島伊達教会婦人会に通訳婦人・婦人伝道者として出席している。ちなみにこの婦人会には、同期生安部ヤスの夫となる笹尾条太郎も出席していた。まつは、同日付で飯坂教会に婦人伝道者として赴任した。無償にて派遣されている件につき飯坂教会より宮城女学校ワイドナー宛感謝状が贈呈されている²⁷。

1903（明治36）年8月、義弼38歳、まつ25歳のときに結婚し、10月に夫婦でアメリカに帰化した。

その後

1906（明治39）年に帰国し、義弼はその翌1907年から青山学院神学部教授となり聖書語学と旧約学を担当し、1937（昭和12）年まで30年間勤めた。また聖書の改訳にも精力的に取り組み、改訳に関して出版（雑誌掲載含む）されたものは、旧約聖書の19%、新約聖書の73%におよんだ²⁸。義弼の改訳の方針が述べられている²⁹。

改訳の主意は原文の意義を明かにし、その語勢を弱めざると共に亦日本文としてもスラスラと読み通される様にしたいことである。

²³ 佐々木哲夫「資料室の使命」『宮城学院資料室年報』第28号、2023年、3頁。

²⁴ 左近義慈「左近義弼とその時代」『神学』27号、東京神学大学神学会、1965年、74-89頁。

²⁵ 『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年、570頁。

²⁶ 津田まつの生年月日、および生地については「仙台日本基督教会 会員名簿 第一号」（日本基督教団仙台東一番丁教会所蔵）を参照。卒業後簿の進路については、「Catalogue Miyagi Girls' School Sendai Japan 1916-1917」（宮城学院資料室所蔵）、90頁を参考とした。

²⁷ 『日本基督教団福島伊達教会百年史年表』福島伊達教会百年史編集委員会、1991年、26-27頁。

²⁸ 「左近義弼とその時代」87頁。

²⁹ 同86頁。

旧約学というものがまだ確立していなかった時代、着々と地味に聖書の翻訳に努力していたのが左近義弼だったと、息子義慈は父の偉業を顧みている。義弼は、1944（昭和19）年79歳で亡くなり、その6年前の1938（昭和13）年にまつは60歳で亡くなっている³⁰。



写真8. 左近義弼とまつ(写真提供:左近豊氏)

5. 酒井勝軍（さかいかつとき）

森かのの夫である酒井勝軍は独立のキリスト教伝道者で、東京唱歌学校を設立し讃美歌の指導・普及に従事した。また、日本のピラミッドの発見者や日ユ同祖論者としても知られている³¹。勝軍については、彼の思想や生涯をまとめた久米晶文氏の著書『「異端」の伝道者 酒井勝軍』を参考として紹介する³²。

生い立ち

勝軍は、1874（明治7）年、山形県上山市で生まれた。生家は資産家であった。父の山下吉重は上山藩士族（藤井松平家）で、御用人馬廻役を務めていた。次男の勝軍は、幼少期に旧藩主の命により親戚関係にあった酒井姓を継ぐ。小学校を卒業後、1887（明治20）年、山形英学校に入学し、宣教師J. P. モールより洗礼を受ける³³。しかし、家庭の事情（破産）により一年半で退学する。その後、東北学院に入学し、苦学して1894（明治27）年に卒業する。在学中、勝軍を惹きつけたのは音楽だった。卒業後、家族のために就職するが、勝軍の胸中には音楽研究のために渡米したいとの思いがあった。1898（明治31）年、念願かなって渡米し、シカゴ音楽大学やムーディ聖書学院で学んでいる。

³⁰ 『橄欖』第20号、宮城女学校、1938年、71頁。その年の永眠者欄に「第七回左近まつ」と掲載があった。

³¹ 久米晶文『「異端」の伝道者 酒井勝軍』学研パブリッシング、2012年、10頁・145頁。

³² 久米晶文『「異端」の伝道者 酒井勝軍』学研パブリッシング、2012年。

³³ 山形英学校は、校主（県知事）を始め学校経営の理事者には県の有力者がなり、教師陣には校長の押川方義をはじめキリスト者として1887年に開校された。しかし経営難から4年で廃校となった。J. P. モールは、合衆国改革派教会の日本派遣第2番目の宣教師。山形英学校、東北学院でも教え、宮城女学校では第2代校長（1893年9月-1894年8月）を務める。

結婚

1902 (明治 35) 年に帰国し、勝軍は東京唱歌学校を設立し、讃美歌の指導・普及に従事した。『うれしき鐘歌』(03)、『賛美論』(06)、『教育と音楽』(06)などの著書を刊行した³⁴。

かのは、1878 (明治 11) 年、福島県北会津郡川南村に生まれ、1899 (明治 32) 年に宮城女学校を卒業する。卒業後 2 年間は、Helper として婦人教師の下で働き、その後、1901 年から 1903 年まで幼稚園の保母をしている³⁵。1903 (明治 36) 年、勝軍 29 歳、かの 25 歳のとき結婚した。かのは病弱で入退院を繰り返す、「ちゑ子 (長女) が 17 歳になるまで生きて居てくれ…」と勝軍を嘆息させたという³⁶。

その後

勝軍が亡くなった後に発行された『神秘之日本・終結号』の中で、先に紹介した左近義弼は「酒井君を懐ふ」との題で思い出を語っている。互いの妻が宮城女学校の同期生という縁で、まつ (左近夫人) に連れられ、左近は勝軍の讃美歌運動に顔を出したこともあったが、「陸軍の走狗と成り果てたる背教の異端者と好 (よしみ) を通じようと思はず、三十年近くも疎み過ごして居ました」が、昭和十年代に入り、たまたま勝軍の神代文化の講演会を聴く機会があり、共感共鳴し「仙境に遊ぶが如き心地」を味わったと記されている³⁷。

1905 (明治 38) 年、勝軍は語学が堪能であったことから、観戦外国武官接待係として日露戦争に従事する。この体験により勝軍は、これまでの反戦平和主義から真逆の思想へと価値観を一変させた。このことが、左近の「陸軍の走狗と成り果てたる背教の異端者」との言葉に代表されているのだろう³⁸。勝軍のその後の思想・主義に関しては、『「異端」の伝道者 酒井勝軍』を参照されたい。



写真9. ちゑ子、勝軍、かの。
大正4年頃の撮影
(『「異端」の伝道者 酒井勝軍』237頁)

³⁴ 『日本キリスト教歴史大事典』教文館、1988年、561頁。

³⁵ 森かのの生年月日、および生地については「仙台日本基督教会 会員名簿 第一号」(日本基督教団仙台東一番丁教会所蔵)を参照。卒業後簿の進路については、「Catalogue Miyagi Girls' School Sendai Japan 1916-1917」(宮城学院資料室所蔵)、90頁を参考とした。

³⁶ 『「異端」の伝道者 酒井勝軍』201-202頁。

³⁷ 『神秘之日本 第四十五号 酒井勝軍先生終結号』神秘之日本社、昭和15年、62頁。左近義弼「酒井君を懐ふ」

³⁸ 『「異端」の伝道者 酒井勝軍』204-220頁。

勝軍は、1940（昭和15）年、66歳で亡くなった。『神秘之日本・終結号』最終頁にかの
と長女ちゑ子の連名による文章「御挨拶」がある。当時、かのは62歳である。それ以後
のかのの足跡については明らかにできなかった。

II. 顔写真の人物特定

第7回卒業生写真の人物特定を試みる。写真10に示すとおり、写真後方左から順にA
～Eとする。小泉ハルは宮城女学校教員時代の写真があり、写真前列中央Dの人物であ
ると既に判明している。また、津田まつに関しても、ご子孫の左近豊先生に写真の判定を
昨年度依頼し、晩年の左近義弼夫妻の写真を送っていただき、写真後列右Bの人物であ
ることが特定されている。課題は残る3名（A・C・E）の人物特定である。



写真10. 第7回卒業生

小泉ハル（磯村源透氏夫人） D
菊地トラ（加藤與五郎氏夫人）
安部ヤス（笹尾糸太郎氏夫人）
津田まつ（左近義弼氏夫人） B
森 かの（酒井勝軍氏夫人）
（卒業生と夫たち）

近年のバイオエンジニアリング分野における生体認証やコンピューター復顔法にみられ
るように顔認証の技術進歩は著しい³⁹。顔認証においては、複数の顔特徴点を抽出し、そ

³⁹ 今岡仁『顔認証の教科書』プレジデント社、2021年、17-22頁。日本自動認証システム協会『よくわかる生体認証』オーム社、2019年、31-39頁。科学警察研究所宮坂祥夫、吉野峰生、瀬田季茂「バイオエンジニアリングの歴史—復顔法の現状と今後の展望」松崎雄嗣『バイオエンジニアリング部門報 BIOENGINEERING NEWS』no. 20 Summer (1995. 7) [https://www.jsme.or.jp/bio-files/news/20/20-3.html]。

の顔特徴量の解析によって表情や個体の識別をコンピュータ AI 機能が出力する⁴⁰。顔認証のように多数の被験者から迅速かつ正確に本人認証を行う場合と異なり、本稿での対象者は3名であり、名前が特定された晩年の顔写真も存在する。それゆえ、卒業時と晩年の顔写真において経年変化の少ない顔特徴点を抽出し、その顔特徴量の照合によって本人の特定が可能であると考えた。

本稿では、顔特徴点として、瞳孔間距離を1とした場合、瞳孔間を結ぶ直線と上顎の歯列の下端線との距離の比率、いわゆる、目歯比率を顔特徴量とする。顔面頭蓋は脳頭蓋に比して成長発育が早く10歳で96パーセントが完成する。また顔の高さや幅も10歳までに90パーセント完成するという⁴¹。すなわち10歳以降の頭蓋であるならば頭蓋骨の経年変化はほとんどないと考えられる。頭蓋骨と当該者と思われる人物の顔写真を重ね合わせて復顔するスーパーインポーズ法においても、左右の眼窩下縁と下顎骨正中位最後点などの顔特徴点を撮影焦点の箇所を選んでいく。他方、頭蓋骨を直接計測することのできない卒業時と晩年の顔写真による識別においては、頭蓋骨ではなく顔を外から特定できる顔特徴点を選ばなくてはならない。そのような観点から考えるならば、目頭と目尻を結んだ眼瞼裂の位置が通常眼窩の高さの下3/10とされているように頭蓋骨と密接に関連している瞳孔間距離と上顎の歯列の下端を顔特徴点とする目歯比率は目視で計測できる顔特徴量であり、顔写真による人物識別の有効な顔特徴量になり得る。そこで以下のような手順で目歯比率を計測し人物の比較をすることとした⁴²。

- 1) 卒業写真によって各人の目歯比率を計測する
- 2) 晩年の顔写真によって各人の目歯比率を計測する
- 3) 目歯比率の値によって卒業写真の人物を特定する

なお、検証のため既知の2名を含む卒業写真5名全員の計測を行った。最初に既知2名の卒業時と晩年の写真の目歯比率を表1に示す。

⁴⁰ 今岡仁『顔認証』102-4頁。野宮浩揮、宝珍輝和尚「顔特徴点を用いた特徴選択と特徴抽出による表情認識に基づく映像中の表情表出シーン検出」『京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究 DEIM Forum 2011 c1-5』[<https://db-event.jpn.org/deim2011/proceedings/pdf/c1-5.pdf>]。

⁴¹ [<https://blog.goo.ne.jp/zaurus13/e/9cdf89e04272641394208d6948ce9a8>]「目歯比率に根拠はあるのか？成長による変化は？」。橋本正次「確実な個人識別手段としてのスーパーインポーズ法に関する研究」『歯科学報』92(3), (1992) 2, 429。

⁴² [https://www.jstage.jst.go.jp/article/biomechanisms/12/0/12_KJ00004275292/_pdf/-char/ja] 科学警察研究所宮坂祥夫、吉野峰生、瀬田季茂「骨から顔貌を復元する」『バイオメカニズム』2 (1974), 4。

表1. 既知2名の目歯比率

人物	卒業写真	晩年写真
D. 小泉ハル	1.196	1.183
B. 津田まつ	1.058	1.054

小泉ハルと津田まつの卒業写真と晩年写真の目歯比率を比較すると、2名とも年齢を重ねても測定値はほぼ変わらないことがわかる。この結果から、目歯比率が有効な識別方法になると判断される。残る3名についても同様に目歯比率を測定し、名前の特定を試みる。

表2. 卒業写真3名の目歯比率

A	1.217
C	1.000
E	1.181

表3. 晩年写真3名の目歯比率

菊地トラ	1.250
森かの	1.018
安部ヤス	1.125

卒業写真 A の目歯比率は 1.217 である。他方、晩年写真の目歯比率が 1.2 以上は菊地トラ [1.250] だけである。卒業写真 C の目歯比率は 1.000 である。測定値に最も近いのは、晩年写真の目歯比率が 1.018 の森かのである。さらに E の人物の目歯比率は 1.181 である。安部ヤスの晩年時の目歯比率は 1.125 であり、他の 2 人と有意差があり安部ヤスと判断される。よって卒業写真 A の人物は菊地トラ、C の人物は森かの、E の人物は安部ヤスと判断される。判定結果を卒業写真に記入したのが下の写真 11 である。



写真11. 卒業生の名前

- A : 菊地トラ (加藤與五郎氏夫人)
- B : 津田まつ (左近義弼氏夫人)
- C : 森 かの (酒井勝軍氏夫人)
- D : 小泉ハル (磯村源透氏夫人)
- E : 安部ヤス (笹尾条太郎氏夫人)

Ⅲ. さらなる検証

卒業写真（A・C・E）と（トラ・かの・ヤス）の晩年の写真だけを検証者 30 人に提示し、目視での識別を行ってもらった。結果は下記表 4 のとおりである。

表4. 目視による人物特定

		晩年写真					
		菊地トラ		森かの		安部ヤス	
卒業 写 真	A	25 名	83%	3 名	10%	2 名	7%
	C	3 名	10%	26 名	87%	1 名	3%
	E	2 名	7%	1 名	3%	27 名	90%

目視による識別結果は、卒業写真 A は菊地トラ、卒業写真 C は森かの、卒業写真 E は安部ヤスだった。この結果は、目歯比率の結果と同じである。検証者に顔のどの部位を基準として選んだかを質問してみると、目や口元と答える人が多かった。中には、目と口元までのバランスと話す人もいた。人の顔を特定するとき私たちは無意識のうちに目歯比率を実践していると思われる。

おわりに








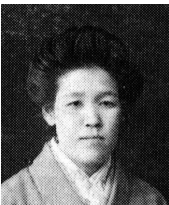


今回の調査により、宮城女学校第 7 回生卒業写真 5 名ひとりひとりの人生を知ることができた。朝ドラヒロインのモデルになった小泉ハル以外の 4 名の生涯は、それほど光があたることはなかったかもしれない。しかし、自分の信じた道をひたすらに突き進む夫と共に歩んだドラマが存在していた。宮城女学校で学び、婦人宣教師との人格的な交わりを通して涵養されたキリスト教の精神が彼女たちの人生の糧となり支えになったと思われた。

本稿を書くにあたり、公益財団法人加藤科学振興会 常務理事・事務局長岡本明氏より加藤与五郎・トラ夫妻の写真をご提供いただいた。また、5 名の受洗記録について東一番丁教会瀬谷寛牧師より掲載のご許可をいただいた。加藤与五郎、笹尾桑太郎、酒井勝軍の資料を東北学院史資料センターの方々よりご教示・ご提供いただいた。また、本稿Ⅱ. 顔写真の人物特定の日歯比率については、本学理事長・学院長の佐々木哲夫先生にご指導・ご教示をいただいた。末筆ながら、ご協力くださった皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。

(さとう あき / 宮城学院資料室職員)

付属資料

I. 卒業写真・晩年写真の目歯比率

名前	卒業写真	晩年写真
A. 菊地トラ		
(目歯比率)	1.217	1.250
B. 津田まつ		
(目歯比率)	1.058	1.054
C. 森かの		
(目歯比率)	1.000	1.018
D. 小泉ハル		
(目歯比率)	1.196	1.183
E. 安部ヤス		
(目歯比率)	1.181	1.125

Ⅱ. 第7回卒業生の一覧表

	小泉ノハル	菊地トラ	安部ヤス	津田まつ	森かの
生年月日	1877(M10)年3月16日	1878(M11)年3月5日	1878(M11)年2月25日	1878(M11)年1月16日	1878(M11)年12月8日
逝去年月	1918(T7)年1月	1978(S53)年3月2日	1961(S36)年10月29日	1938(S13)年	不明
逝去時年齢	41歳	100歳	83歳	60歳	不明
出身地	福島県相馬	福島県相馬	宮城県仙台	山形県山形市	福島県北会津郡
受洗年	1893(M26)年	1893(M26)年	1890(M23)年	1889(M22)年	1894(M27)年
洗礼教会・牧師	相馬中村教会／吉田亀太郎	相馬中村教会の可能性高い／吉田亀太郎	不明/ジョンズ	山形美以教会の可能性が高い／木村七十郎	仙台日本基督教教会/三浦宗三郎
仙台日本基督教会転入日	1894(M27)年11月11日	1894(M27)年11月11日	1894(M27)年1月24日	1893(M26)年11月15日	1894(M27)年
宮城女学校卒業年	1899(M32)年6月29日 22歳	1899(M32)年6月29日 21歳	1899(M32)年6月29日 21歳	1899(M32)年6月29日 21歳	1899(M32)年6月29日 20歳
卒業後の進路	1899-02年 宮城女学校教師、日本女子大・津田塾で学ぶ、1905年報知新聞社入社	1899-02年 宮城女学校教師、1899-1900年 宮城女学校教師	1899-02年 シュネネーダー夫人のHelper	1899-01年 Helper、福島伊達教会・飯坂教会で婦人伝道者として働く	1899-01年 Helper、1901-03年 幼稚園保母
結婚年	1903(M36)年1月 26歳	1900(M33)年 22歳	1902(M35)年7月1日 24歳	1903(M36)年8月 25歳	1903(M36)年 24歳
夫	磯村源透	加藤興五郎	笹尾泰太郎	左近義嗣	酒井勝軍
夫職業	実業家	化学者	カント哲学者	聖書翻訳者	伝道者・音楽家など
生年一逝去	(1869) - 1925年	1872-1967年	1871-1941年	1865-1944年	1874-1940年
逝去時年齢	56歳	95歳	70歳	79歳	66歳

参考資料: 本稿Ⅰ. 第7回卒業生の夫たち で紹介した資料
生年月日、出身地(生地)、受洗年、洗礼教会・牧師は「仙台日本基督教会 会員名簿第一号」(日本基督教団仙台東一番丁教会所蔵)を参照
仙台日本基督教会(現・日本基督教団仙台東一番丁教会)転入日は、「日本基督教団 仙台東一番丁教会史」1991年、911頁を参照